

エマソンにおける「自然」と「魂」

——その人間理解をめぐる一考察——

庄 司 一 平

はじめに

エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) は、19世紀アメリカの随筆家、詩人、ニューイングランド・トランセンデンタリズムの指導的人物など、さまざまな肩書きで世に知られてきた。実際、その著作や講演の主題は多岐に渡り、その散文調の文体からも、「あまりに捉えようのない」¹ 思想家として扱われてきた。彼に関する研究も、アメリカ文学、アメリカ哲学史、アメリカ宗教史など、さまざまな角度からのアプローチが試みられてきたが、とりわけ彼の宗教思想に対しては、「健全な心の宗教」² (W・ジェイムズ)、「内面化された宗教」³ (宮田 元)、「諸形式の破壊の試み」⁴ (D・L・スミス) など、さまざまな、そしてしばしば互いに相容れない説明が与えられてきたのが現状である。

本稿は、このように多様に理解されてきたエマソン思想に対して、彼の人間に対する理解という点に着目し、そこへ光を当てようとするものである。そしてその手がかりとして、彼の「自然」および「魂」(“Over-Soul”)を取り上げてみたい。というのは、これらの概念には、エマソン思想の全体に見られるある共通の構造が認められるからである。以下で見ていくように、エマソンは結果的に、さまざまな理念や概念における矛盾や対立を、矛盾や対立それ自体として提示している。「静態的で、究極的に完全な有機的統一」と「動的な多様性」との矛盾⁵、「矛盾語法の楽園」⁶といったエマソン研究者たちの説明は、彼の思想の全体に見られる構造を適切に言い表している。筆者にとっても、この矛盾や対立こそが、エマソンの人間理解の骨格をなすものであると思われるからである。

1. 「自然」と「魂」

エマソンは、その処女作『自然』（1836年）の序章において、「自然」と「魂」を次のように区別している。

哲学的に考えると、宇宙は「自然」と「魂」から構成されている。それ故、厳密に言う
と、我々から分離されているすべてのもの、「哲学」が〈非我〉として区別するすべての
もの、つまり、自然も人工も、すべての他者も私自身の体も、〈自然〉というこの名のも
とに位置づけられなければならない。⁷

ここでは、エマソンの「自然」と「魂」という区別に従うと、「自然」が〈非我 NOT ME〉であるとすれば、「魂」は〈我 ME〉であることになる。しかしながら、この〈我〉を目的格の“ME”として表記すると、彼の認識論的な特徴を見えにくくすることになる。その理由は、この〈非我〉としての〈自然〉という部分が、彼の観念論に対する最も接近したアプローチを示しているためである。〈自然〉が「我々から分離されている」ということは、〈自然〉を間接的にしか把握できない、つまり、〈自然〉そのものと一体となってその存在の根本原理を直観的・統一的に探ることができない、ということを示している。〈自然〉は印象やそれに基づく観念によってしか知ることができないのである。このような自然の異他的特質は、〈自然〉の实在性に対するエマソンの不可知論的な表明において如実に示されている。

自分の感覚の報告の確実性を試したり、感覚の与える印象が遠く離れた物象と一致するかどうかを知ることが私には全くできない以上、オリオンが天高く存在しようと、あるいは何かの神がその像を魂の天空に描き出しているのであろうと、一体どんな違いがあるだろう。（中略）たとえ何であれ、私が自分の感覚の正確さを確かめてみることでできない限り、私にとってそれは観念的なものである。⁸

人間の感覚能力を疑い、「自然」と「魂」、主観と客観、見るものと見られるものとの間の決定的な隔たりを確認することで、彼は観念論者を自認している。従って、〈我〉を“ME”とすることは、これを対象や客体の位置へおくことであり、「魂」を〈自然〉の一部に、つまり「我々と分離されているすべてのもの」の一つとすることになるのである。こうして見ると、エマソンの〈非我〉は、〈我〉と対立するものというよりも、“ME”という目的格では表され得ない絶対的な

主観（初めの引用では「我々」）に対立するもの、つまりこの絶対主観の認識や行為の対象であり客体である〈自然〉として解釈した方が、彼の認識論的な立場を明確にすることになるであろう。

エマソンのこのような認識論的立場において、この〈非我〉としての〈自然〉に対立するものは、“ME”としての〈我〉ではないとすれば、「絶対主観」であると述べた。この「絶対主観」とも呼べるような事柄について、エマソンはどのように語っているのかを、次に見てみたい。

このように、宇宙は避け難く我々の色を帯び、あらゆる客観は次々と主観それ自体の中へと取り込まれる。主観は存在する、主観は拡大する。すべての事物は早晩然るべきところへと収まるのである。私が在るように、私は見るのである。我々がどんな言葉を用いようと、我々であるところのもの以外の何ものをも語ることはできないのである。⁹

ここでの「主観」は、「客観」を自らの中へと取り込んで拡大していく。このような「拡大する主観」というイメージは、すべての「客観」を「主観」へと取り込むという点で、「絶対主観」を象徴していると言える。またここで「絶対」と言うのは、認識や行為の場面において、主観と客観との区別による相対的な主観性と区別するためである。エマソンの場合、「客観」に対する「主観」、見られるものに対する見るものという関係は、固定した静態的なものではなく、いずれは「主観」に吸収されるべきものであり、ある統一へと向かう動的・弁証法的な関係なのである。

以上のような分析は、エマソンによる「自然」と「魂」との「哲学的」な区別を否定するものであるかのように見えるであろう。しかしながら、エマソンの「魂」と「自然」との区別、あるいは「主観」と「客観」との弁証法的な関係は、単に認識に関する問題であるに過ぎない。彼にとっては、「魂」や「主観」の、「自然」や「客観」に対する優位を主張するだけでは十分ではなかったように思われる。実際、そのような観念論は、彼によって、「大工仕事や化学作用の原理以外の原理で自然を説明するための仮説」¹⁰に過ぎないとされている。次のような〈自然〉の中での神秘体験を告白する文章は、哲学的観念論を超えたレヴェルにおけるその境地を表している。

裸の大地に立ち、—— 頭を爽やかな大気に洗われて、無限の空間のさなかにもたげれば、

——一切の卑しい自己執着は消える。私は一個の透明な眼球になる。私は無であり、一切が見え、「普遍者」の流れが私の全身を巡り、私は神の一部だ。¹¹

ここでは、「透明な眼球」となった「私」はもはや主観ではない。これは、客観に相対的に対立する主観としても、「客観」を自らの内にすでに取り込んだ絶対的な「主観」としても、成立してはいない。「神」の一部として、「私」は「無」と化すのである。そしてその結果、「魂」と「自然」、あるいは「主観」と「客観」という二元論も、「普遍者」への絶対的統一という名のもとで解消されているのである。また、他方で、エマソンは「自然」という語に、ある超越論的な意味を込めて用いることもある。

松の木、川、花々が並び咲く様子は、彼の目には自然とは映らない。自然はつねに何処かにある。¹²

このような「自然」には、具体的な自然物や自然環境全体という意味を超えた、自然の自然(本性)ということが含意されている。つまり彼は、多様な現象、即ち「非我」としての〈自然〉(nature)と、究極的な実在としての《自然》(Nature)とを、間接的にであれ区別しているのである。そしてこの《自然》は、「魂」と区別された〈自然〉ではなく、その区別を超越した、あるいはそれに先立つものとして描かれている。

エマソンの「自然」という語が、自然物の総体を表す抽象名詞としてだけでなく、事物の本性および究極的実在を表すものとして語られていること自体は、英語の“nature”の語義からしても特記するには及ばない。しかしながら、この“nature”の両義性がエマソン思想の構造的特質を、さらには彼の人間理解を象徴するものであるということは、彼の“Over-Soul”という語に込められた意味との対比によって、より一層明らかとなる。

2. “Over-Soul”の宇宙観

エマソンにおいて、究極的実在に与えられる名前は、「神」、「一なるもの」、「自然(本性)」等20以上を数えることができ、これらは文脈によって、また時には修辭的な目的によって使い分けられている。しかしながら、それらは殆どが

人格を超えた究極的実在として述べられており、宇宙を超越し且つ宇宙に遍く存在する普遍的な原理としてのその性質は、ほぼ共通していると思われる。そしてここで取り上げる“Over-Soul”も、そのうちのひとつと見ることができる。

ここでは、エマソンにおいて、この“Over-Soul”が、究極的実在のどのような性格を表すものなのか、ということを一概観することを通じて、彼が“Over-Soul”あるいは「魂」という語を用いて究極的実在や人間について示そうとしたものは何か、という問題について考察してみたいと思う。

エマソンが“Over-Soul”について直接言及し、ある程度まとまった文章を書いているのは、全著作を通じて次の1箇所のみである。

過去と現在の過ちに対する「至高の批評家」であり、(中略)唯一の予言者は、我々がその中で、(中略)安らうところのあの偉大な本性である。すなわち、すべての人々の個別的な存在が、その内部に含まれ、かつその中で他のすべてのものとひとつになるところの、あの「統一性」、あの“Over-Soul”である。(中略)我々は継承し、分裂し、様々な部分や粒子として生きている。一方で人間の内部には全体の魂がある。すなわち、賢明な沈黙(中略)普遍的な美(中略)永遠の〈一なる者〉がある。そしてその中に我々が存在し、その至福がすべて我々の近づきやすいものであるところのこの深遠な力は、いつも自足し完全であるだけでなく、見る行為と見られるもの、見る者と光景、主観と客観とが一つでなのである。我々は世界を、太陽、月、動物、木としてひとつずつ見ているが、これらがその部分として輝いているところの全体は魂なのである。¹³

『至高の批評家』、「唯一の予言者」、「偉大な本性」、「統一性」、「Over-Soul」、「全体の魂」、「賢明な沈黙」、「普遍的な美」、「永遠の〈一なる者〉」、「深遠な力」、「魂」等々、エマソンがこれほど多様な言葉を用いて言い表そうとするのは、エマソンによれば、「定義できず、測ることもできない」¹⁴ 何ものか、である。しかし彼は、「もし神の言葉が使えないのなら、世俗の言葉によってでも」¹⁵、この何ものかを示したいと言うのである。

さて、ここで彼の“Over-Soul”や「魂」の具体的な内容や様々な性質について見られる要素を簡単にまとめてみると、次のようになるであろう¹⁶。第一にそれは、あらゆる地上的な存在とは異なり、またより以上のものであるがゆえに、個人の「魂」(soul)よりも量的に大なるものである。この場合の“Over-Soul”は、個人の「魂」をあらゆるレベルにおいて超える、超越的な外なる実在で

ある。第二にそれは、あらゆる地上的な存在にくまなく浸透し、またそれらを形成する内在的な原理である。この場合の“Over-Soul”は、あらゆる制約を免れるがゆえに個々の「魂」よりも質的に勝り、その純粹さと絶対性において個人の「魂」の規範や目標とするところとなるものである。続いて、第三にそれは、全てを含み全てに行き渡る人間と世界における普遍的原理である。個人の「魂」と普遍的な「魂」との間の量的・質的な差異にも関わらず、両者はその根源と目的において同一である。エマソンの関心はまさにこの普遍的原理の真なる認識にある。すなわち彼は、人間存在の神聖さ、人間の「魂」はすべて実在と一体であるということを示そうとするのである。また人間は、自らに内在する究極的実在と同一の本性を認識することによって、地上的な存在のままでその実在と一つになることができるというのである。

この分析によれば、第一の要素と第二の要素は、“Over-Soul”がそれぞれ人間個人の外にあるか（超越）、内にあるか（内在）という点で異なっている。しかし、それが人間の「魂」と同一であるという普遍性（第三の要素）において、第一の要素と第二の要素とは固く結びついており、これらは同一のものの二つの側面であると言うことができるのである。従って、ここでは、これら三点がエマソンの「魂」の特質を暗示しているということを指摘することができる。第一の要素においては、“Over-Soul”はいわば他者である。それは個人の「魂」を超越した外なる実在であるために、個人の「魂」の内側には見出すことのできないものである。第二の要素においては、“Over-Soul”はいわば自己である。それは個人の「魂」に内在する原理、つまり内なる実在としては、個人の「魂」の内に見出すことのできるものである。しかしその質において、それは個人の「魂」よりも優れたものである。エマソンにおいて、“Over-Soul”とそれを認識し行為する個人の「魂」とは、その位置づけが明らかに異なっている。

内部から、あるいは背後から、我々を通して一筋の光が事物に降り注ぎ、我々に、我々は無で光こそがすべてだと気づかせる。¹⁷

ここには、彼が「魂」と呼ぶものを見ていく際に突き当たる問題がはっきりと現れている。彼は、「我々」は無であるにもかかわらず、自ら無であることを認

識するとしている。しかしこれは矛盾ではない。無であると同時に無であることを認識することはできないけれども、記憶ないし想像力によって無である（あった、あるであろう）と述べることは可能であるかも知れないからである。つまり、エマソンがしばしば詩的修辭を用いて言い表すところの神秘的瞬間においては、主観と客観（自己と他者の）の区別がない（「我々は無で光こそがすべてだ」）のに対して、その自己言及的・再帰的な認識において、その「無」が客観としてはじめて現れてくる（「我々に……だと気づかせる」）のである。実際、先の“Over-Soul”に言及した箇所においては、それは主客および自他の区別を超えたものであった。そして、エマソンの「魂」についてもそれは同様に当てはまるのであり、まさにこれが第三の普遍性という要素なのである。

あらゆるものは、人間の内にある魂が、1つの器官ではなく、すべての器官に生命を吹き込み活動させるものだという、記憶・計算・比較の能力のような1つの機能ではなくてこれらを手足のように使うものだという、1つの能力ではなくて光だということ、知性や意志ではなくて知性や意志を支配するものだという、これらのものがその内にあるような我々の存在の背景だということ、——所有されず、また所有されることはあり得ない無限の広がりだということ、を示すのに役立つ。¹⁸

ところで、エマソンの“Over-Soul”及び「魂」の用法は、彼の宇宙観を象徴している。彼がここで描く宇宙は、一言で言えば「一」、即ちあらゆるものの統一である。

このように魂を崇拜し、古人の言ったように、「魂の美しさは計り知れない」ということを学べば、人間は、世界そのものが魂のなす久遠の奇跡であることに気づくようになり、個々の驚異にはさほど驚かないようになるだろう。俗なる歴史はひとつもなく、歴史はすべて神聖であること、一つの原子、一瞬の時間のうちに宇宙が現れていることを学ぶことになるだろう。¹⁹

この引用から分かるように、彼の「魂」は「神」と同義であり、“Over-Soul”もこの「魂」の性質（超越・内在・普遍）を“Over-”という接頭辞で強調したものに過ぎない。しかし、注目すべきは、この“Over-Soul”及び「魂」という観念が彼の宇宙観と密接に関わっている点である。ここで重要だと思われるのは、先の“Over-Soul”の第三の要素である。エマソンの“Over-Soul”は、人間と世界に生命と秩序を与える究極的な原理として語られてはいるが、彼はその

原理がすべての人間の内に在るという側面を特に強調するのである。エマソンは「魂」(Soul) という語に、端的に実在を表す「神」(God) や「神の霊」「聖霊」(Spirit) などの語と同等の価値を与えているが、彼によれば、内に「魂」を宿している個人は、その「魂」が根源的に神聖であるが故に、「神」に等しい存在であると言う。そしてこの性質は、特殊な啓示や靈感を得ることができるような特定の人々だけがもっているものではなく、誰もが本来的に具えている普遍的な性質である。

こうして見ると、エマソンの“Over-Soul”は、前節の「自然」と比べて、人間の「魂」の存在様式を問題にしたものとして解釈されるかも知れない。しかし、ここで真に問題となっているのはあくまで“Over-Soul”，つまりは彼の「神」についてなのであって、人間独自の存在のあり方が主題なのではない。“Over-Soul”は宇宙全体に遍く行き渡った性質を表す象徴であり、人間は「神」に最も近い存在ではあるが、それだけで宇宙は全体とはならない。それは、「神」と「自然」ないし宇宙との本質的差異を認めず、宇宙を統一的・一元論的に理解するというエマソンの宇宙観を代表しているのである。

3. 両極的存在者としての人間

エマソンの宇宙観における人間と「神」および「自然」との関係は、統一あるいは合一という語で要約することができる。「透明な眼球」のくだりに典型的に示されるように、人間は、〈自然〉の中で、その《自然》を通じて、「神」と一体であることを直観する。人間と自然は、その恍惚の境地においては、「神」という同一の本質・本性に由来するという同一性においてのみ現れ、「自然」と「魂」、主観と客観、自己と他者などの差異はほとんど無視されていると言って良い。このような合一という側面は、これまで見てきたところでは、「自然」と「魂」の区別が解消され、すべてが無となることによって、また、個人の「魂」が“Over-Soul”と本質的・根源的に同一であることによって、説明されているのである。

それでは、エマソンが「自然」と「魂」を区別した意図は何処にあるのであ

ろうか。筆者は、エマソンの宇宙観における人間の位置づけが、この問題を解く鍵であると考え。そして、その際重要な意味をもつと思われるのは、彼の「自己」という概念である。「自己」という語は、一般に、認識や行為の主体が自らを再帰的に言及する際に用られる。また社会的場面においては、主体がその自己と自己ならざる他者とを区別する際に用いられる。この自己は、誰もが自分のことを指して同じ意味で使用できるという等質性をもっている。ところが、エマソンはこのような自己の等質性を、万物に拡大して適用するのである。第一に、彼の「自己」は、万物の本質・本性という意味をもつ。エマソンの宇宙観においては、万物は神的な本性を共有し、表面的には多様（例えば、自然環境の地理的多様性や季節の移り変わりなど）であっても、根源的には同一で調和のとれた（例えば、数学・物理等の自然法則に基づく）コスモスを形成していた。彼が「自然」や「魂」の語を、具体的な自然物および自然環境全体、あるいは個人の「魂」としてだけでなく、自然の自然や魂の魂というようないわば超越論的な意味を込めて用いていることから、彼が「一」なる「自然」および「魂」との究極的合一を志向していたことを窺うことができた。そして彼の「自己」にも、究極的真理としての自己の自己ということが含意されているのである。

喜ぶがいい。人の子よ。希望を持て！ 真理はひとえに健全なものであり、我々は万物の自己に他ならないものを探し出せるのだから。（中略）人に訪れる最高の幸せとは、自分のダイモンに導かれて真に彼自身のものへと至ることである。²⁰

第二に、「自己」はこのようにあらゆるものの本質・本性であることから、「神」と同義である。彼はそのエッセイ『自然』の序章において「自然」と「魂」とを区別したけれども、それは結局は〈自然〉の中での神秘体験に優るものではなかった。「自然」と「魂」、主観と客観との区別を超越した「神」との合一こそが、究極的な目標であった。このことは、彼の「自己信頼」という語において一層明確に伝えられている。

自己信頼とは神への信頼である。²¹

第三に、「自己」はこのように「神」であるために、自己—他者という区別を超

えている。次のような主張も、「私」や「あなた」という語を単なる一人称・二人称ではなく、それらを超えた無人称的（超人称的）な自己として理解しなければならないであろう。

私にとっては、私の本性の法則以外の如何なる法則も、神聖ではあり得ない。²²

あなた自身以外の何ものも、あなたに平和をもたらすことはできない。諸原理の勝利以外の何ものも、あなたに平和をもたらすことはできない。²³

彼によれば、〈自然〉や人間のすべてには「自己」がそなわっている。それは万物を超越し、万物に内在し、万物と根源的に同一の普遍的本質であるという点から、“Over-Soul”と、つまり「神」と共通の構造をもつもの、あるいは「神」そのものとして描かれている。しかし、「神」としての「自己」は唯一無二のものである。それは万物において様々に現象するけれども、あらゆる差異を超越した「一なるもの」である。エマソンの宇宙はこの「一なるもの」の宇宙である。このように、エマソンの「自己」は、あらゆるものの同一性を表すものとして用いられているのである。

他方、エマソンの「自己」概念が重要な意味をもつのは、それが彼の「自然」や「魂」と同様、いわば超越論的に用いられているという理由からだけではない。それは、「他者」の問題と避け難く結びついているからでもある。

あらゆる我と汝との間には、オリジナルとその像との間にあるのと同じような溝ができるだろう。宇宙は魂の花嫁である。すべての個人的な共感は部分的なものである。²⁴

ここには、「自然」と「魂」の区別と同様の構造を見て取ることができる。この「我と汝」、即ち自己と他者の関係は、先の絶対主観としての〈我〉と〈非我〉の関係とは大きく異なっていることは明らかである。ここでの「我」と「汝」は、それぞれ独立した存在として互いに対称的な関係にあり、両者の差異が強調されているのである。

本稿の結論は、エマソンにおいては、「自然」と「魂」および自己と他者の同一性と差異性が、ともに彼の人間理解の両極を担っている、ということである。その根拠は、彼の「運命」（1860年）というエッセイにおける、「両極性」（polarity）という主題にある。

我々の幾何学は、世間一般の諸理念の巨大な軌道を測ったり、それらの復帰を注視した

り、それらの対立を和解させたりすることはできない。我々はただ、自らの両極性に従うことができるだけである。²⁵

もし「運命」を受け入れなければならないのならば、我々は、自由、個人の意義、義務の荘厳さ、資質の力を承認せざるを得ない。これは真実であり、もう一方も真実である。²⁶

エマソンは「神」との全面的な合一を主張したが、しかしそれが完全には不可能であることも理解していた。「人間は黄金の不可能性である」²⁷「人間が彼の存在の頂点にあるのは、人生の中で二、三の瞬間に過ぎない」²⁸という言葉は、宗教や「神」に対するエマソンの両価的な態度を表しているだけでなく、彼が全体的・包括的な人間理解を目指していたということをも示唆している。そしてさらに、そのためには、同一化と差異化という、異なった二つの方法が必要であることを暗示しているように、筆者には思われるのである。

おわりに

これまでの考察によって、エマソンの「自然」および「魂」が、ともに超越論的な含意を有すること、そしてそのことによって、同一化の原理に基づく彼の宇宙観が形成されていること、を指摘することができた。またそれと同時に、エマソンには、「自然」と「魂」の区別に代表される差異化の原理に基づく宇宙観も認められた。エマソン思想に見られるこのような二面性は、さまざまな矛盾や対立それ自体を提示することによって人間存在の両極的本質を求めるといふ彼独自の方法を表していると解釈することができる。このことは実際、さまざまな研究者によって指摘されており、例えばS・E・ウィッチャーは、「彼の立場の真の特異性は、大部分、彼がどちらかひとつの選択肢を避け、かなり正直に彼の経験の全く信じがたい二面性に忠実であり続けたことである」²⁹としている。エマソンの次の言葉は、彼の立場に対するこのような理解を支えるものとなるであろう。

あたかも私が何かを真実だとか誤りだとか決めようとしているかのように、私のすることを少しでも評価されては困るし、私のしないことに少しでも不信を抱かれても困る。私はあらゆる事物を不安定にする。如何なる事実も私には神聖ではなく、ひとつとして俗なるものはない。私は、如何なる「過去」をも背負わずにただ試みるだけの、永遠の探求者である。³⁰

エマソンは人間を、「宇宙の両極をともに引きずる者」³¹、「あらゆるものが同一の理由で肯定も否定もされ得る中間点」³²として捉えている。人間存在のあり方それ自体を問題にする彼のこのような人間理解は、とりわけ初期の研究においては、正面から論じられることが少なく、その「神」観念や神秘主義的側面が中心的主題とされていた。しかしながら、1960年代以降、16巻に及ぶ『日記・雑記』³³や、原稿が残っている説教171篇を収録した『説教全集』³⁴などが公刊されるに従い、エマソンの大まかな全体像が次第に明らかにされつつある。このような状況下において、エマソン研究に対して求められていることは、「宗教とは、如何なる宗教であれ、人生に対する人間の全体的反応である」³⁵という立場に従い、彼の扱ったさまざまな主題を、その人間理解という観点から再び問い直すことにあると、筆者は考えている。それは例えば、エマソンが、原罪や墮落という神学的問題について、一方では「魂のおたふく風邪や麻疹や百日咳」³⁶として、他方では「非常に不幸なことであり、解決するにはあまりに遅すぎる」³⁷問題として、異なった二つの見方を示していることに対して、これらはエマソンにおいてどのような関係にあるのか、またエマソンがこのように一見相容れない主張を提示した意図は何処にあるのか、を問うことにより、彼の人間理解をより包括的に捉えることである。もっとも、人間を両極的存在者と見る見方は、霊肉二元論におけるが如く古典的できえあり、取り立てて目新しい内容をもつものではない。しかし、筆者が協調したいのは、エマソン思想に見られる方法の二面性それ自体であり、このことは、彼の宗教的立場とも深く関わってくるものである。「如何なる事実も聖でも俗でもない」という彼の認識は、アメリカ宗教思想史における自由主義的系譜を辿る上で蔑ろにされてはならないし、また、東西の様々な聖典や哲学・思想に関する書物を通じて自らの思索を深め、懐疑論にも神秘主義にも同じように関心を払う彼のプラグマティックな真理観にも注目されて然るべきであろう。

エマソンは、人間や社会、「自然」や神についての哲学的または形而上学的な体系を構築しようとしたのではなく、むしろ、自らの経験を基盤として、人生論や宗教論、道徳論を自由な形式で人々に問いかけた思想家である。19世紀の

アメリカにおいて彼が抱いていたのは、伝統的な教会に対する不満や懐疑、そして自由な個人の尊厳に対する熱望であった。このような背景から生まれた彼の思想は、近現代のいわゆる世俗社会における信仰のあり方およびその意味や価値をめぐるさまざまな問題を考えていく上で、大いに参考にすべきものであると筆者は考えている。引き続き今後の課題としたい。

[キーワード] エマソン, 「自然」, 「魂」, 「両極性」

注

- 1 David L. Smith, "The Open Secret of Ralph Waldo Emerson," in *The Journal of Religion*, vol. 70, The University of Chicago Press, 1990, p. 22.
- 2 William James, *The Varieties of Religious Experience*, 1902. とりわけ第2講の初めでは、宗教および神の定義に際して、エマソンの宗教が楽観主義として紹介されている。
- 3 宮田 元「エマソンの宗教思想」(『宗教研究』第161号, 日本宗教学会, 1960年), 48頁。
- 4 David L. Smith, *ibid.*, p. 35.
- 5 Richard P. Adams, "The Basic Contradiction in Emerson," in *Critical Theory in the American Renaissance*, 1969, pp. 106-107.
- 6 David L. Smith, *ibid.*, p. 101.
- 7 Ralph Waldo Emerson, *Nature*, 1836 (*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 1, AMS Press, 1979 (second edition), pp. 4-5. 以下 CW と略記)。エマソンからの引用は、すべてこの AMS Press 版全集から訳出した。
- 8 Emerson, *ibid.*, 1836 (CW, vol. 1, pp. 47-48).
- 9 Emerson, "Experience," in *Essays, Second Series*, 1844 (CW, vol. 3, p. 79).
- 10 Emerson, *ibid.*, 1836 (CW, vol. 1, pp. 62-63).
- 11 Emerson, *ibid.*, 1836 (CW, vol. 1, p. 10).
- 12 Emerson, "Nature," in *Essays, Second Series*, 1844 (CW, vol. 3, p. 192).
- 13 Emerson, "The Over-Soul," in *Essays, First Series*, 1841 (CW, vol. 2, pp. 268-269).
- 14 Emerson, *ibid.*, 1841 (CW, vol. 2, p. 270).
- 15 Emerson, *ibid.*, 1841 (CW, vol. 2, p. 270).
- 16 ここでの分析は、次のものを参考にした。Robert Detweiler, 'Over-Rated "Over-Soul",' in *American Literature*, vol. 36, 1964-1965.
- 17 Emerson, *ibid.*, 1841 (CW, vol. 2, p. 270).
- 18 Emerson, *ibid.*, 1841 (CW, vol. 2, p. 270).

- 19 Emerson, *ibid.*, 1841 (*CW*, vol. 2, pp. 296-297).
- 20 Emerson, "Plato; or the Philosopher," in *Representative Men*, 1850 (*CW*, vol. 4, p. 63).
- 21 Emerson, "The Fugitive Slave Law," Lecture read in the Tabernacle, 1854 (*CW*, vol. 11, p. 256).
- 22 Emerson, "Self-Reliance," in *Essays, First Series*, 1841 (*CW*, vol. 2, p. 50).
- 23 Emerson, *ibid.*, 1841 (*CW*, vol. 2, p. 90).
- 24 Emerson, "Experience," in *Essays, Second Series*, 1844 (*CW*, vol. 3, p. 77).
- 25 Emerson, "Fate," in *The Conduct of Life*, 1860 (*CW*, vol. 6, p. 3).
- 26 Emerson, *ibid.*, 1860 (*CW*, vol. 6, p. 4).
- 27 Emerson, "Experience," in *Essays, Second Series*, 1844 (*CW*, vol. 3, p. 66).
- 28 Emerson, "The Philosophy of History," in *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson: 1836-1838*, vol. II, The Belknap Press of Harvard University Press, 1964, p. 86.
- 29 Stephen E. Whicher, *Freedom and Fate: An Inner Life of Ralph Waldo Emerson*, University of Pennsylvania Press, 1971, p. 31. ウィッチャーはこのすぐ後で、エマソンの神観念に関して、「『如何なる命題も承認も否定もされ得るところの』当惑させる一元論的の二元論、あるいは二元論的の一元論である」と形容している。
- 30 Emerson, "Circles," in *Essays, First Series*, 1841 (*CW*, vol. 2, p. 318).
- 31 Emerson, "Fate," in *The Conduct of Life*, 1860 (*CW*, vol. 6, p. 22).
- 32 Emerson, "Spiritual Laws," in *Essays, First Series*, 1841 (*CW*, vol. 2, p. 138).
- 33 William H. Gilman et al. eds., *Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, 16 vols., The Belknap Press of Harvard University Press, 1960-84.
- 34 Albert J. von Frank et al. eds., *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*, 4 vols., University of Missouri Press, 1989-1992.
- 35 William James, *ibid.*, p. 35.
- 36 Emerson, "Spiritual Laws," in *Essays, First Series*, 1841 (*CW*, vol. 2, p. 132).
- 37 Emerson, "Experience," in *Essays, Second Series*, 1844 (*CW*, vol. 3, pp. 75-76).

Emerson's Nature and the Over-Soul
— A Consideration on his View of Man —

Ipei Shoji

Ralph Waldo Emerson (1803-1882) is known as an American thinker, an essayist, a poet, and a leader of the New England Transcendentalism in the nineteenth century. Up until today, many various studies on him have been attempted, and most of them have labelled him an optimist, an individualist, a mystic and so forth. It is certain that these partially explain the features of his thought, but few have succeeded in pointing out his total view of Man.

This report will consider his terms "Nature" and "the Over-Soul", which both are particularly significant in his religious cosmology, in order to clarify his way of viewing Man. His ambiguous use of these terms not only presents the way and the structure of his transcendental thinking, but also implies his understanding of Man as a polar being. For Emerson, Man's polarities, such as Nature and the Soul, Each and All, Freedom and Fate, provide Man with a way to exist in the universe. It is said that Emerson's thought is full of contradictions or paradoxes, but by illustrating them he intended to comprehensively understand Man. Thus, the richness in Emerson's religious thought lies in his concept of polarity and in his polar view of Man itself.